環境ビジネスベンチャーとしてランドスケープから発信する

アネックス「5×緑（ごばいみどり）」の取り組み

文＝LANDSCAPE DESIGN　写真＝LANDSCAPE DESIGN、アネックス
Text = LANDSCAPE DESIGN　Photography = LANDSCAPE DESIGN、ANNEX

環境問題、地球温暖化が世界の課題となっているいま、環境と経済が融合した日本を目指そうと、「環境」「エコ」などに関連した、新しいビジネスに取り組む企業を発掘・支援する「eco japan cup（エコジャパンカップ）」が2006年より毎年開催されている。その中で2007年に三井住友銀行賞を受賞したのがアネックスによる「5×緑」事業。ここでは、三井住友銀行の佐藤氏とアネックスの宮田氏による対談を行い、受賞後の展開と今後ランドスケープ界から環境ビジネスをどのように発信していくことができるか、その可能性を探った。

左頁上・上／春の花の咲く70cm角の里山ユニットとノシバのベンチを組み合わせたストリートファニチャー（丸の内フラワーギャラリー 2007）

「eco japan cup」とは?

「環境と経済の好循環社会・日本」の実現を目指し、官民協働事業として、エコビジネスの芽を見つけ、育てるコンテスト。ビジネス、カルチャー、ライフスタイルのカテゴリーを設け、経済活動に関わるすべてのステークホルダーを対象としている。各部門で企業賞を提供し、大学との共同研究にふさわしいビジネスアイデアがあれば、産学協働プロジェクトとして研究助成も行うなど時代のニーズに応えた新しいエコプロジェクトである。主催は、環境ビジネスウィメン、環境省、総務省、日本政策投資銀行、三井住友銀行。尚、2009年度の応募は8月末まで募集中。
HP：http://www.eco-japan-cup.com/

佐藤耕司（さとうこうじ）
株式会社三井住友銀行経営企画部CSR室長

金融機関が環境ビジネス支援

LD　金融機関が環境ビジネスを応援するという取り組みは大変興味深いですね。

市村　私ども金融機関の環境問題への取り組みを考えるにあたり、本業である金融仲介機能（融資・預金・為替など）にいかに「環境」というキーワードを重ね合わせていくかに焦点を置きました。また、あらゆる業界の企業・あらゆる世代の方々とのお取引があることは我々の強みであり、同時に環境に関する情報を整理して発信することも重要な役目と考えています。「eco japan cup」もその一環です。主催者として参画することで、三井住友銀行賞の進呈とともに、応募者の方へ事業計画やキャッシュフロー※に関するアドバイスを行っています。

LD　それは三井住友銀行のCSRということですか?

佐藤　はい、そうです。CSRとして環境問題にどうアプローチしていくか。そのひとつの答えです。

環境ビジネスベンチャーとしてのアネックス「5×緑」

LD　このコンテストに応募しようと思ったきかっけかは?

宮田　最初は、雑誌の記事でコンテストの募集要項を拝見して興味を持ちました。私たちの事業が、社会的にどう捉えられ、評価されるのか確認したくて応募しました。

LD　「5×緑」事業に三井住友銀行賞を贈呈されましたが、その決めてはどんな点だったのでしょうか。

佐藤　審査には、実現性・環境保全・改善効果・コンプライアンス（遵法性）に重点を置いています。「5×緑」は、都市緑化と里山保全の循環システムの事業化の発展性を評価させていただきました。審査員のコメントの中にも、今後本格的にビジネス展開していくことの可能性を期待する声が多くありました。

LD　受賞後に周りからの反響はありましたか?

宮田　すごく変わりましたね。それまでは、システム自体のデザイン性に興味を持たれて設計事務所に採用していただくことが多かったのですが、受賞後は、デベロッパーや企業のCSR部門から直接お話をいただくことも増えました。5×緑は、里山保全と結びつく点に特徴があるので、「生物多様性」というテーマからお話が広がるなど、私たちがもともと価値を置いていたことに対して評価が得られ、多面的な展開ができるようになった

「5×緑」とは?

「5×緑」システムは、緑化用に開発された直方体の金網に、保水性の高い軽量土壌「アクアソイル」を充填して植生基盤をつくり、側面にも植栽するもの。上面だけの緑化と比べ緑の量が5倍になることから「5×緑」と名付けられた。「里山ユニット」としてモジュール化することで、限られた都市空間でも設置しやすく、単体で販売している。同様のシステムを用いて現場施工することも可能。「里山ユニット」に植栽する植物は、設置地域の植生に合わせ、主に在来種の木や草で構成されている。里山の植生を保全するため、林床等の管理委託を行い、そこで再生された植物を都市緑化に使う実験的な取り組みを行っている。
HP：http://www.5baimidori.com /

宮田生美（みやたふみ）
株式会社アネックス5×緑事業部責任者・シニアアカウント

左／滋賀県高島市の畑地区を散策し
植生状況を確認するメンバー
上／地元住民と土地の風土について語り合うひと時も貴重な時間

ことは大きな成果です。

産官学協同プロジェクトで共同研究

LD　受賞後、本格的にビジネス発展を図るため、「5×緑」は慶応大学と共同で研究を進めているそうですが。

佐藤　このコンテストの発足当初から、さまざまな立場で環境に携わるプレイヤーの知恵と行動力をお借りすることが必要と考えていました。そこで、応募者と大学の橋渡しを行い、一定の条件が整えば共同研究の場を提供する仕組みをつくったらどうかと考えたわけです。いわゆる、産学協同プロジェクトということです。研究に対する助成金は三井住友銀行がバックアップしています。

LD　共同研究の進行状況は?

宮田　事業のビジネス的な観点と里山環境保全の二つの観点からサポートをいただいています。2年間のプログラムで、今年はその2年目にあたります。ビジネス的な観点では、主に知財戦略についてのアドバイスをいただいています。里山の面では、5×緑は元々、「昔ながらの在来の植物を都市に取り戻し、季節感のある暮らしを楽しむこと」をテーマにしてきました。ところが昔は身近にあった木や草が今、次々と姿を消しています。里山の豊かな植生は、人が森や田畑の手入れをすることで守られてきました。そこで、里山の方々に協力をお願いし、5×緑が林床や畔の管理委託をして、そこから蘇った植物を都市緑化のために提供いただくプロジェクト「東京里山計画」を始めました。関東の里山拠点は栃木県にある馬頭の森、関西は滋賀県の畑の棚田です。慶応大学との共同研究では、馬頭をフィールドに植生調査や埋土種子調査、採取跡の復元観察などが行われています。こうした基礎的な学術調査は、大変貴重なデータになると考えています。

佐藤　馬頭という町名は雰囲気があって素敵ですね。まちづくりも展開していけそうです。ここまで活動が広がっているなんて驚きました。

宮田　学術調査ももちろんですが、学生の皆さんにとっては昔ながらの里山文化や生活習慣を体験する事も良い経験になっているのではないかと思います。馬頭の森では、自然の巡りとともにある暮らしの豊かさをいつも感じます。「もてなし」という言葉が今も自然に生きていて、お伺いすると山の幸がいっぱいの手料理が待っています。どうやら事前におじいちゃんとおばあちゃんが相談してメニューを決めてくれているようで、「学生さんが来るから」とイノシシ鍋を用意してくれていたりして、ビックリです。

今回の共同研究の中では、「緑育」というテーマから、昨年は、大学生たちが先生になって川崎市の高校生に「里山ユニット」をつくる授業を行いました。イマドキの高校生と思いきや、一生懸命ユニットをつくる姿に感動しました。今年の夏は、高校生たちが馬頭の森を訪問し、農家民泊をしながら山の管理や暮らしを学びました。

佐藤　若い世代の環境コミュニケーションのきっかけづくりまで広がるとは感動的です。

宮田　私たちがやれることはささやかではありますが、三井住友銀行や慶応大学といった一流企業や大学とコラボレーションできたことよって、社会的な信用が得られることはとても心強い。ネットワークも含めたチームの大きな自信につながりました。都市で緑を楽しむ人が増えた分、里山の環境も良くなって、森や山や田の手入れが生業のひとつとして成立するようになることを願っています。

ランドスケープの観点から環境ビジネスを

LD　お話を伺って、ランドスケープの視点から環境ビジネスが生まれ進展していると感じました。ランドスケープには大きな可能性があるのではないかと思います。ランドスケープ業界への期待などあればお聞かせください。

佐藤　それぞれに特徴的で素晴らしいお仕事をされていると思いますが、今はまだ「点」でしかない取り組みも多いのではないでしょうか。たとえば、この「eco japan cup」のような環境に関するイベントに参加することから企業間のつながりを持ち、「点」から「線」に、さらに「面」にしていくことではじめてビジネスとしての展開が見えてくることもあろうかと思います。そういったつながりの中で独自の付加価値を見出していく可能性を、ランドスケープの業界は潜在的に持っているのではないでしょうか。

また、来年名古屋市で開催される生物多様性に関する国際会議は大きな起爆剤になると思います。ランドスケープ業界の方には、千載一遇のこのチャンスを大いに活用していただきたいと思います。それまでに自社の戦略をどう立てていくかが重要で、今がまさに勝負どころですね。

宮田　私たちは5×緑の事業を環境ビジネス、もしくはソーシャルビジネスと位置付けています。そこでは社会的な価値と経済的な価値の両立を考えます。今まさに持続可能な社会の構築が大きな社会的課題なのですから、その重要性はますます増していると思います。

佐藤　最近山種美術館の植栽も手がけたそうですね。

宮田　はい。山種美術館の入る建物全体の植栽施工をやらせていただきました。

日本画のコレクションを持つ山種美術館は、すべて在来の緑で飾られています。馬頭の森の植物たちも使われています。里山の植生の保全と結びついた緑は、大きなフレームで捉えれば生物多様性への貢献につながります。また在来植物で構成された都市の緑地は都市ならではの生態系を新たに生み出します。何より、四季の変化がある日本の緑は美しく、人の心を和ませる力を持っていると感じます。

LD　ありがとうございました。今後の研究成果にも期待しております。

※キャッシュフロー
現金の収入と支出。投資に必要な資金とそれから得られる収益。

栃木県馬頭町の雑木林の風景

馬頭町では、5×緑のメンバーと学生、地元住民がともに地域の植生調査を行う。活動の中では、学生と地元住民の交流が図られ、食文化の風土も勉強するきっかけとなる。学生にとっては、かけがえのない体験となる

Information

新「山種美術館」10月1日オープン

山種美術館は、これまであった千代田区三番町から渋谷区広尾に移転、10月1日に新たにオープンすることになった。建築・設計には日本設計が携わり、外構設計・デザインに、プランタゴの田瀬理夫氏と「5×緑」が参加、日本画の美術館にふさわしい上質で落ち着きある空間となった。

開館記念展「速水御舟〜日本画への挑戦〜」10月1日（木）〜11月29日（日）

HP：http://www.yamatane-museum.or.jp/

左／美術館のエントランスを飾る「かずら垣」
右／2F〜6Fの東側テラスに置かれた「里山ユニット」